

**表音文字の欠点は、読みの機能が劣るだけではない。
それ以上に、思考力の発達を鈍くする点に問題がある。**

私が初めて、小学校の一年生を担当した時のことです。国語の教科書に、初めて、「さくぶん」という言葉が出て来た時、私は、これを漢字で「作文」という表記に改めて、黒板に書いて子供たちに示しました。そして、「これは『さくぶん』と読む字です。これから、この『作文』という言葉が、どんな意味の言葉かお話してあげます」と子供たちに話しかけますと、子供たちの方から、「先生『作文』の作ってという字は、『作る』っていう字だね。『作文』で『作る文』で読めるね」「『作文』で『文を作る』ことじゃあないの」と言うのです。私が驚いて、「よくわかったねえ」と言いますと、「そんなこと、あたりまえじゃあないか」と言いたげな顔をしていました。その後間もなく、「ぶんしゅう」という言葉が、教科書に提出されましたが、これも「文集」という表記で、子どもたちは独力でこれを理解しました。

私は、「さくぶん」「ぶんしゅう」という表記で、この言葉を指導しなければならない世の先生たちは大変だな、と思います。いや指導する先生はまだ良いのです。子供たちが、この言葉を理解するのに、もっと大変です。この言葉を理解し、記憶するのに、何の手がかりもないのですから。それに比べると、「作文」や「文集」という表記は、教師が説明を加えないでも、子供たちが、ただ文字を見るだけで、意味を正しく理解できるのですから、学習がすごく能率的になります。「漢字が、

国語教育の障碍になっている」とは、何という考え違いでしょう。「さくぶん」「ぶんしゅう」という表記がやさしいと考えるのは、ただ「発音できる」というだけのことに過ぎないのです。いくら発音できても、意味がわからなければ「読める」とは言わないのです。それに反して、「作文」「文集」が正しく発音できなくても、(つまり「つくるぶん」「ぶんあつまる」としか読めなくても)意味さえ通ずれば、「読めた」と同じことになるのです。

だから、「漢字が国語教育の障碍になる」と言う人は、「漢字にいくつもの音訓があるのは不合理だ」ということを必ず言いますが、どちらも、物の半面しか見ないで、それもごく物の表面しか見ないで、即断を下す軽率な人だと言うことができます。音訓問題については後で述べたいと思います。

一年生の算数用語に、「半分」という言葉があります。教科書には「はんぶん」とかな書きされて提出されますので、子供たちには、先の「さくぶん」と兄弟のような関係の言葉に思えるに違いありません。一般に先生たちは、この「はんぶん」という言葉は、事実在即して理解させることを試みるだけです。しかし、私は、「半分」と黒板に書いて、この文字が持つ言葉の意味から理解させて行きます。「分」はすでに、「分ける」という言葉で、子供たちは理解しています。この字は、「刀」でのように「木を左右に両断する」意味を表現していますので、大変記憶しやすい文字です。そこで、「半」という字が、その字形の示すように、物の真中であることを理解させれば、「半分」とは、物の真中か

ら二つに切り分けた形である」ことが、子供たちに容易に理解できるのです。このように、言葉を漢字によって指導しますと、「物を二つに切り分けても、大小が生ずるような分け方では、半分とは言えない」こともよく納得できます。「はんぶん」という表記で指導した場合よりも、言葉の持つ意義、内容が、正確に、しかも容易に習得できるのです。

ところで、私がこういうことを言いますと、必ず「それは我田引水の論だ」と言って、「言葉の理解は、言葉と、言葉の持つ意義とを結びつけるだけの問題に過ぎない。文字には全然関与しないことだ」と言う人がいます。なるほどその通り、言葉の理解は、言葉の持つ「音」と「義」とを結びつける仕事です。それ以外の何物でもないのです。その意味では、文字は言葉の理解に直接の関係はないと言ってよいでしょう。そうかと言って、「だから、言葉の理解に、文字の影響などあるはずがない」と断定したら、それはあまりにも軽率だと言わなければなりません。

化学反応における触媒の働きを考えていただきたいと思います。例えば、水の電気分解に、ただ電流を水に流しても、水は酸素と水素とに分解してはくれません。ところが、水に稀硫酸か、苛性ソーダを入れると、水は分解を始めます。稀硫酸も、苛性ソーダも、水の分解には、直接には勿論、間接的にもまったく関係のない存在であるし、事実、稀硫酸も苛性ソーダも、何の化学変化をも起さないのです。稀硫酸も苛性ソーダも、自身何の作用もしないのですが、ただ「電気」と「水」との間に介在することによって、水の分解作用が始まるのです。

私は、言葉の理解 記憶作用に、漢字が触媒の働きをしているのを、子供の学習活動から、はっきりと見ることができました。

「はんぶん」という表記では、「はんぶん」という言葉と、その言葉の持つ意義とが化合する作用が起りにくいのですが、「半分」という表記がこの両者の間に介在すると、「半分」が触媒の働きをして、言葉と、言葉の持つ意義とが化合しやすくなるのです。

これを、心理学用語を借りて言いますと、「はんぶん」の場合は、「無意味語」の「機械的記憶」になり、記憶が行われにくいのですが、「半分」の場合は「構造的記憶」になり、「論理的記憶」になって、記憶しやすくなるのです。つまり、かな書きでは「はんぶん」の「ぶん」は、先の「さくぶん」の「ぶん」とまったく同一の表記であって、「無意味語」に等しいのですが、「半分」の「分」は、明らかに「分ける」という意味を表し示しているのです。「半分」という表記の方が、記憶に容易であり、記憶を確実に保持することができることは、心理学のこの種の実験から明らかに証明している所です。

さて、ここで、一步を譲って、(その必要はまったくないのですが)子供たちが、先生からこの言葉の指導を受けた当初においては、「はんぶん」も「半分」も、同じ程度の、理解が得られたものと仮定しましょう。そして、問題を、この言葉が、次に提出された場合、両者の表記から得られる印象が同じであるかどうか、ということに移してみましょう。それは、決して同じではあり得ないと思います。なぜなら、「半分」という表記では、その字形に、この言葉の持つ意義、内容が全部表し示さ

れていますので、文字を見れば、誰でも、その意義、内容が再認しやすく、忘れかけた人も、想起することができるほどです。ですから、文字を見る度毎に、記憶が自然に強められ、深められるでしょう。これに反して、「はんぶん」という実記では、最初に指導された時の意義・内容(とりわけ、**均分**の意味等)など、正確に想起する何の手がかりもありませんので、正しく想起できるかどうか、極めて疑わしいと言わなければなりません。

私は、二回にわたる比較実験から、「**漢字によって、言葉の理解や記憶が容易になるばかりか、子どもたちの思想が、精密に分化され深められて行く**」という事実を発見しました。

同じ言葉でも、「はんぶん」という表記によって理解したのと、「半分」という表記によって理解したのとでは、その言葉の認識の程度に明らかに差異が見られるのです。国字改革を口にする人は、必ずこの点に注意して、よくよく考えていただきたいと思います。私は、この点を特に重視しますので、「漢字がたとい学習に困難な文字であるとしても(事実はやさしいのですが)絶対に漢字を廃止してはならない」ということを強く主張するのです。

蛇足かも知れませんが、「分」に関係のあるもう一つの例を挙げておきたいと思います。

それは、音楽用語の「二分音符」「四分音符」等の言葉です。この「分」は、普通「ぶ」(「ぶん」と発音することを、主張する音楽家もあります)と発音されて、「二ぶおんぷ」「四ぶおんぷ」という表記で、小学校

の教科書にも提出されるものです。この表記では、この音楽用語はまず正しく理解できないと思ってさしつかえありません。「二と二で四」「四と四で八」ですから、「二ぶおんぷ二つで四ぶおんぷ」「四ぶおんぷ二つで八ぶおんぷ」と考えるのが普通です。正常な頭の持ち主なら、当然そう考えるべきです。ところが、それでは全く反対なのですから困ってしまいます。

しかし、「分」が「分ける」という意味の字ですから、「二分音符」「四分音符」と書き、「分」の意味に注意させておけば、誤解の起りようがありません。つまり、全音符を基準にして、これを**二つに分けたもの**が「二分音符」であり、**四つに分けたもの**が「四分音符」だと理解させればよいのです。これで、一年生でもこれらの関係を正しく、はっきりと把握して、決して、誤解を起しません。私は、第一次の時に、これを一年生に指導して、りっぱに正しく理解させました。中学生でも誤解しやすいことですが、漢字を通して理解させれば、小学校の一年生でも、容易に、しかも正確に理解することができるのです。これに反して「四ぶおんぷ二つで、二ぶおんぷの長さになる」と指導される子供はまったくかわいそうだと思います。正常な持ち主でも、これでは頭が変になってしまうのが当然です。